

1

解答解説のページへ

2つの実数 a, b は $0 < b < a$ を満たすとする。関数 $f(x) = \frac{1}{b}(e^{-(a-b)x} - e^{-ax})$ の最大値を $M(a, b)$ 、最大値をとるときの x の値を $X(a, b)$ と表す。ここで、 e は自然対数の底である。

- (1) $X(a, b)$ を求めよ。
- (2) 極限 $\lim_{b \rightarrow +0} X(a, b)$ を求めよ。
- (3) 極限 $\lim_{b \rightarrow +0} M(a, b)$ を求めよ。

2

解答解説のページへ

点 O を原点とする座標平面において、点 A と点 B が $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 5$, $\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OB} = 2$, $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OB} = 3$ を満たすとする。

- (1) $\overrightarrow{OB} = k\overrightarrow{OA}$ となるような実数 k は存在しないことを示せ。
- (2) 点 B から直線 OA に下ろした垂線と OA との交点を H とする。 \overrightarrow{HB} を \overrightarrow{OA} と \overrightarrow{OB} を用いて表せ。
- (3) 実数 t に対し、直線 OA 上の点 P を $\overrightarrow{OP} = t\overrightarrow{OA}$ となるようにとる。同様に直線 OB 上の点 Q を $\overrightarrow{OQ} = (1-t)\overrightarrow{OB}$ となるようにとる。点 P を通り直線 OA と直交する直線を l_1 とし、点 Q を通り直線 OB と直交する直線を l_2 とする。 l_1 と l_2 の交点を R とするとき、 \overrightarrow{OR} を \overrightarrow{OA} , \overrightarrow{OB} , t を用いて表せ。
- (4) 3 点 O, A, B を通る円の中心を C とするとき、 \overrightarrow{OC} を \overrightarrow{OA} と \overrightarrow{OB} を用いて表せ。

3

解答解説のページへ

1 個のさいころを投げて出た目によって数直線上の点 P を動かすことを繰り返すゲームを考える。最初の P の位置を $a_0 = 0$ とし、さいころを n 回投げたあとの P の位置 a_n を次のルールで定める。

・ $a_{n-1} = 7$ のとき, $a_n = 7$

・ $a_{n-1} \neq 7$ のとき, n 回目に出た目 m に応じて

$$a_n = \begin{cases} a_{n-1} + m & (a_{n-1} + m = 1, 3, 4, 5, 6, 7 \text{ のとき}) \\ 1 & (a_{n-1} + m = 2, 12 \text{ のとき}) \\ 14 - (a_{n-1} + m) & (a_{n-1} + m = 8, 9, 10, 11 \text{ のとき}) \end{cases}$$

- (1) $a_2 = 1$ となる確率を求めよ。
- (2) $n \geq 1$ について, $a_n = 7$ となる確率を求めよ。
- (3) $n \geq 3$ について, $a_n = 1$ となる確率を求めよ。

4

解答解説のページへ

関数 $f(x) = \left| \cos x - \sqrt{5} \sin x - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right|$ について、以下の問いに答えよ。

- (1) $f(x)$ の最大値を求めよ。
- (2) $\int_0^{2\pi} f(x) dx$ を求めよ。
- (3) $S(t) = \int_t^{t+\frac{\pi}{3}} f(x) dx$ とおく。このとき、 $S(t)$ の最大値を求めよ。

5

解答解説のページへ

実数 a, b と虚数単位 i を用いて複素数 z が $z = a + bi$ の形で表されるとき、 a を z の実部、 b を z の虚部とよび、それぞれ $a = \operatorname{Re}(z)$ 、 $b = \operatorname{Im}(z)$ と表す。

- (1) $z^3 = i$ を満たす複素数 z をすべて求めよ。
- (2) $z^{100} = i$ を満たす複素数 z のうち、 $\operatorname{Re}(z) \leq \frac{1}{2}$ かつ $\operatorname{Im}(z) \geq 0$ を満たすものの個数を求めよ。
- (3) n を正の整数とする。 $z^n = i$ を満たす複素数 z のうち、 $\operatorname{Re}(z) \geq \frac{1}{2}$ を満たすものの個数を N とする。 $N > \frac{n}{3}$ となるための n に関する必要十分条件を求めよ。

1

解答解説のページへ

(1) $0 < b < a$ のとき, $f(x) = \frac{1}{b}(e^{-(a-b)x} - e^{-ax}) = \frac{1}{b}e^{-ax}(e^{bx} - 1)$ に対して,

$$f'(x) = -\frac{a}{b}e^{-ax}(e^{bx} - 1) + \frac{1}{b}e^{-ax} \cdot be^{bx} = -\frac{1}{b}e^{-ax}\{(a-b)e^{bx} - a\}$$

$f'(x) = 0$ の解は, $e^{bx} = \frac{a}{a-b}$ より $x = \frac{1}{b} \log \frac{a}{a-b}$ であり, ここで $\alpha = \frac{1}{b} \log \frac{a}{a-b}$ とおき, $f(x)$ の増減を調べると右表のようになる。

x	...	α	...
$f'(x)$	+	0	-
$f(x)$	↗		↘

すると, $f(x)$ は $x = \alpha$ のとき最大値をとるので, $X(a, b) = \alpha = \frac{1}{b} \log \frac{a}{a-b}$

(2) $\lim_{b \rightarrow +0} X(a, b) = \lim_{b \rightarrow +0} \frac{1}{b} \log \frac{a}{a-b} = -\lim_{b \rightarrow +0} \frac{1}{b} \log \frac{a-b}{a} = -\lim_{b \rightarrow +0} \frac{1}{b} \log \left(1 - \frac{b}{a}\right)$

ここで, $t = -\frac{b}{a}$ とおくと, $b \rightarrow +0$ のとき $t \rightarrow -0$ となり,

$$\lim_{b \rightarrow +0} X(a, b) = -\lim_{t \rightarrow -0} \frac{1}{-at} \log(1+t) = \frac{1}{a} \lim_{t \rightarrow -0} \frac{\log(1+t)}{t}$$

さて, $g(t) = \log(1+t)$ とすると, $g'(t) = \frac{1}{1+t}$ から $g'(0) = 1$ となり,

$$\lim_{t \rightarrow 0} \frac{g(t) - g(0)}{t} = \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\log(1+t)}{t} = 1$$

したがって, $\lim_{b \rightarrow +0} X(a, b) = \frac{1}{a} \cdot 1 = \frac{1}{a}$ である。

(3) $M(a, b) = f(\alpha) = \frac{1}{b}e^{-a\alpha}(e^{b\alpha} - 1) = ae^{-a\alpha} \cdot \frac{e^{b\alpha} - 1}{b\alpha}$ となり, (2) から, $b \rightarrow +0$ のとき

$\alpha \rightarrow \frac{1}{a}$, $a\alpha \rightarrow 1$, $b\alpha \rightarrow +0$ なので,

$$\lim_{b \rightarrow +0} M(a, b) = \frac{1}{a} \cdot e^{-1} \cdot 1 = \frac{1}{ea}$$

[解説]

関数の極限の問題です。(2)は, 少し試行錯誤して, 微分係数の定義式を利用するように変形をしました。(3)も同様です。

2

解答解説のページへ

- (1) $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 5$, $\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OB} = 2$, $\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OB} = 3$ のとき, $\overrightarrow{OB} = k\overrightarrow{OA}$ と仮定すると,
 $k^2\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 2$, $k\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 3$

すると, $5k^2 = 2$ かつ $5k = 3$ となり, 両式を満たす実数 k は存在しない。

- (2) 点 B から直線 OA に下ろした垂線と OA との交点 H に対して, $\overrightarrow{OH} = s\overrightarrow{OA}$ とおくと $\overrightarrow{HB} = \overrightarrow{OB} - s\overrightarrow{OA}$ となり, $\overrightarrow{HB} \cdot \overrightarrow{OA} = 0$ から,

$$\overrightarrow{OB} \cdot \overrightarrow{OA} - s\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OA} = 0, \quad 3 - 5s = 0$$

すると, $s = \frac{3}{5}$ から, $\overrightarrow{HB} = \overrightarrow{OB} - \frac{3}{5}\overrightarrow{OA}$ である。

- (3) $\overrightarrow{OP} = t\overrightarrow{OA}$, $\overrightarrow{OQ} = (1-t)\overrightarrow{OB}$ のとき, 点 P を通り直線 OA と直交する直線を l_1 , 点 Q を通り直線 OB と直交する直線を l_2 とし, l_1 と l_2 の交点を R とする。

ここで, $\overrightarrow{OR} = p\overrightarrow{OA} + q\overrightarrow{OB}$ とおくと,

$$\overrightarrow{PR} = p\overrightarrow{OA} + q\overrightarrow{OB} - t\overrightarrow{OA} = (p-t)\overrightarrow{OA} + q\overrightarrow{OB}$$

$$\overrightarrow{QR} = p\overrightarrow{OA} + q\overrightarrow{OB} - (1-t)\overrightarrow{OB}$$

$$= p\overrightarrow{OA} + (q+t-1)\overrightarrow{OB}$$

すると, $\overrightarrow{PR} \cdot \overrightarrow{OA} = 0$ から $5(p-t) + 3q = 0$ となり, $5p + 3q = 5t$ ……①

また, $\overrightarrow{QR} \cdot \overrightarrow{OB} = 0$ から $3p + 2(q+t-1) = 0$ となり, $3p + 2q = -2t + 2$ ……②

①②より, $p = 16t - 6$, $q = -25t + 10$ となり,

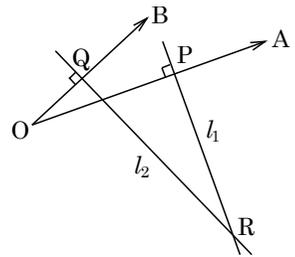
$$\overrightarrow{OR} = (16t - 6)\overrightarrow{OA} - (25t - 10)\overrightarrow{OB} \dots\dots\dots③$$

- (4) 3点 O, A, B を通る円の中心 C は, 線分 OA と線分 OB の垂直二等分線の交点なので, ③に $t = \frac{1}{2}$ を代入すると $R = C$ となり,

$$\overrightarrow{OC} = \left(16 \cdot \frac{1}{2} - 6\right)\overrightarrow{OA} - \left(25 \cdot \frac{1}{2} - 10\right)\overrightarrow{OB} = 2\overrightarrow{OA} - \frac{5}{2}\overrightarrow{OB}$$

[解説]

平面ベクトルの基本題です。(4)は(3)の結果がストレートに利用できます。なお,(3)は(2)の結果を利用してもよかったです……。



3

解答解説のページへ

(1) さいころを n 回投げたあとの P の位置 a_n について、 $n \geq 1$ のとき、 $1 \leq a_n \leq 7$ であることを数学的帰納法で示す。

(i) $n=1$ のとき

$a_0 = 0$ から、1 回目に出た目が 1, 2, 3, 4, 5, 6 のとき、 a_1 はそれぞれ 1, 1, 3, 4, 5, 6 となり、 $1 \leq a_1 \leq 7$ である。

(ii) $n=k$ のとき

$1 \leq a_k \leq 7$ と仮定すると、 $k+1$ 回目に出た目が 1, 2, 3, 4, 5, 6 のとき、 a_{k+1} は右表のようになる。

これより、 $1 \leq a_{k+1} \leq 7$ となる。

(i)(ii)より、 $1 \leq a_n \leq 7$ である。

さて、 $a_2 = 1$ となるのは、右表より、 $a_1 = 1$ または $a_1 = 6$ である。

$a_k \backslash$ 目	1	2	3	4	5	6	7
1	1	3	4	5	6	7	7
2	3	4	5	6	7	6	7
3	4	5	6	7	6	5	7
4	5	6	7	6	5	4	7
5	6	7	6	5	4	3	7
6	7	6	5	4	3	1	7

(a) $a_0 = 0 \rightarrow a_1 = 1 \rightarrow a_2 = 1$ のとき

1 回目に出た目が 1 または 2 で、2 回目に出た目が 1 の場合より、その確率は、

$$\frac{2}{6} \times \frac{1}{6} = \frac{2}{36}$$

(b) $a_0 = 0 \rightarrow a_1 = 6 \rightarrow a_2 = 1$ のとき

1 回目に出た目が 6 で、2 回目に出た目が 6 の場合より、その確率は、

$$\frac{1}{6} \times \frac{1}{6} = \frac{1}{36}$$

(a)(b)より、 $a_2 = 1$ となる確率は、 $\frac{2}{36} + \frac{1}{36} = \frac{1}{12}$ である。

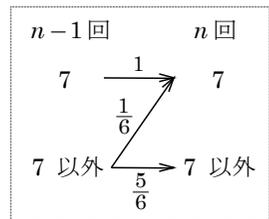
(2) $a_n = 7$ ($n \geq 1$) となる確率を p_n とおくと、 $p_1 = 0$ で、

$$p_n = p_{n-1} + \frac{1}{6}(1 - p_{n-1}) = \frac{5}{6}p_{n-1} + \frac{1}{6} \quad (n \geq 2)$$

これより、 $p_n - 1 = \frac{5}{6}(p_{n-1} - 1)$ となり、

$$p_n - 1 = (p_1 - 1) \left(\frac{5}{6}\right)^{n-1} = -\left(\frac{5}{6}\right)^{n-1}$$

よって、 $p_n = 1 - \left(\frac{5}{6}\right)^{n-1}$ となり、この式は $n=1$ のときも満たしている。



(3) $n \geq 1$ のとき、 $a_n = 1$ となる確率を q_n とおくと、(1)から、 $q_1 = \frac{1}{3}$ 、 $q_2 = \frac{1}{12}$

また、 $a_n = 6$ となる確率を r_n とおく。すると、 $2 \leq a_n \leq 5$ となる確率は、(2)から

$$1 - p_n - q_n - r_n = \left(\frac{5}{6}\right)^{n-1} - q_n - r_n \text{ となる。}$$

ここで、(1)の表を参照すると、 $n \geq 2$ で、 $q_n = \frac{1}{6}q_{n-1} + \frac{1}{6}r_{n-1} \dots\dots\dots \textcircled{1}$

$$\begin{aligned}
 r_n &= \frac{1}{6}q_{n-1} + \frac{1}{6}r_{n-1} + \frac{2}{6}(1 - p_{n-1} - q_{n-1} - r_{n-1}) \\
 &= \frac{1}{6}q_{n-1} + \frac{1}{6}r_{n-1} + \frac{1}{3}\left\{\left(\frac{5}{6}\right)^{n-2} - q_{n-1} - r_{n-1}\right\} \\
 &= -\frac{1}{6}q_{n-1} - \frac{1}{6}r_{n-1} + \frac{1}{3}\left(\frac{5}{6}\right)^{n-2} \dots\dots\dots ②
 \end{aligned}$$

すると、①+②より $q_n + r_n = \frac{1}{3}\left(\frac{5}{6}\right)^{n-2}$ となり、①に代入すると、 $n \geq 3$ で、

$$q_n = \frac{1}{6}(q_{n-1} + r_{n-1}) = \frac{1}{6} \cdot \frac{1}{3}\left(\frac{5}{6}\right)^{n-3} = \frac{1}{18}\left(\frac{5}{6}\right)^{n-3}$$

[解説]

確率と漸化式の難しめの問題です。問題文からイメージが湧かないので、最初に具体的に表を作ってみました。そして、その表を見ながら立式をしています。なお、表中の a_k が 2 の列は形式的に計算しただけなので、削除しても構いません。

4

解答解説のページへ

(1) $f(x) = \left| \cos x - \sqrt{5} \sin x - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right|$ に対し, $g(x) = \cos x - \sqrt{5} \sin x - \frac{3\sqrt{2}}{2}$ とすると,

$$g(x) = \sqrt{6} \left(\cos x \cdot \frac{1}{\sqrt{6}} - \sin x \cdot \frac{\sqrt{5}}{\sqrt{6}} \right) - \frac{3\sqrt{2}}{2}$$

ここで, $\cos \alpha = \frac{1}{\sqrt{6}}$, $\sin \alpha = \frac{\sqrt{5}}{\sqrt{6}}$ とおくと, $g(x) = \sqrt{6} \cos(x + \alpha) - \frac{3\sqrt{2}}{2}$

$-1 \leq \cos(x + \alpha) \leq 1$ より, $f(x) = |g(x)|$ は $\cos(x + \alpha) = -1$ のとき最大となり, 最大値は $\left| -\sqrt{6} - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right| = \sqrt{6} + \frac{3\sqrt{2}}{2}$ である。

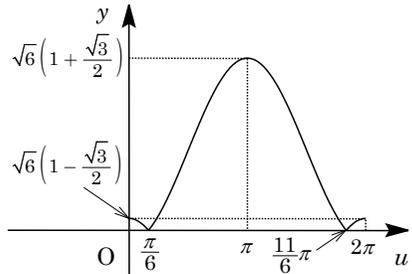
(2) $I = \int_0^{2\pi} f(x) dx = \int_0^{2\pi} \left| \sqrt{6} \cos(x + \alpha) - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right| dx$ に対し, $u = x + \alpha$ とおくと,

$$I = \int_{\alpha}^{2\pi+\alpha} \left| \sqrt{6} \cos u - \frac{3\sqrt{2}}{2} \right| du = \sqrt{6} \int_{\alpha}^{2\pi+\alpha} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du$$

ここで, $h(u) = \sqrt{6} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right|$ とおくと,

$h(u + 2\pi) = h(u)$ から, $h(u)$ は周期 2π の周期関数である。

さらに, $h(2\pi - u) = h(u)$ から, $y = h(u)$ のグラフは直線 $u = \frac{(2\pi - u) + u}{2} = \pi$ について対



称になることより,

$$\begin{aligned} I &= \sqrt{6} \int_0^{2\pi} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du = 2\sqrt{6} \int_0^{\pi} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du \\ &= 2\sqrt{6} \int_0^{\pi/6} \left(\cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right) du - 2\sqrt{6} \int_{\pi/6}^{\pi} \left(\cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right) du \\ &= 2\sqrt{6} \left[\sin u - \frac{\sqrt{3}}{2} u \right]_0^{\pi/6} - 2\sqrt{6} \left[\sin u - \frac{\sqrt{3}}{2} u \right]_{\pi/6}^{\pi} \\ &= 2\sqrt{6} \cdot \frac{1}{2} - 3\sqrt{2} \cdot \frac{\pi}{6} - 2\sqrt{6} \cdot \left(-\frac{1}{2} \right) + 3\sqrt{2} \cdot \frac{5}{6} \pi = 2\sqrt{6} + 2\sqrt{2}\pi \end{aligned}$$

(3) $S(t) = \int_t^{t+\pi/3} f(x) dx = \sqrt{6} \int_{t+\alpha}^{t+\alpha+\pi/3} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du$

ここで, $h(u)$ が周期 2π の周期関数であることより, $0 \leq u < 2\pi$ で考えると,

$S(t)$ が最大になるのは, $\frac{(t + \alpha) + (t + \alpha + \frac{\pi}{3})}{2} = \pi$ のときである。

これより, $t + \alpha = \frac{5}{6}\pi$ となるので, $S(t)$ の最大値 M は,

$$M = S\left(\frac{5}{6}\pi - \alpha\right) = \sqrt{6} \int_{\frac{5}{6}\pi}^{\frac{7}{6}\pi} \left| \cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right| du = -\sqrt{6} \int_{\frac{5}{6}\pi}^{\frac{7}{6}\pi} \left(\cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right) du$$

$y = h(u)$ のグラフは直線 $u = \pi$ について対称なので,

$$\begin{aligned} M &= -2\sqrt{6} \int_{\frac{5}{6}\pi}^{\pi} \left(\cos u - \frac{\sqrt{3}}{2} \right) du = -2\sqrt{6} \left[\sin u - \frac{\sqrt{3}}{2} u \right]_{\frac{5}{6}\pi}^{\pi} \\ &= -2\sqrt{6} \cdot \left(-\frac{1}{2} \right) + 3\sqrt{2} \cdot \frac{\pi}{6} = \sqrt{6} + \frac{\sqrt{2}}{2} \pi \end{aligned}$$

[解説]

定積分の計算問題です。周期性や対称性に注目することがポイントです。(3)の解答例は、グラフの形状をもとにした直感的な記述になっています。 t の値で場合分けをした方がよかったですでしょうが。

5

解答解説のページへ

(1) $z^3 = i$ を満たす複素数 z を, $z = r(\cos \theta + i \sin \theta)$ ($r > 0$, $0 \leq \theta < 2\pi$) とおくと,

$$r^3(\cos 3\theta + i \sin 3\theta) = \cos \frac{\pi}{2} + i \sin \frac{\pi}{2}$$

すると, $r^3 = 1$ から $r = 1$ となり, $0 \leq 3\theta < 6\pi$ から $3\theta = \frac{\pi}{2}, 2\pi + \frac{\pi}{2}, 4\pi + \frac{\pi}{2}$ であるので, $\theta = \frac{\pi}{6}, \frac{5}{6}\pi, \frac{3}{2}\pi$ となる。

よって, $z = \cos \frac{\pi}{6} + i \sin \frac{\pi}{6}$, $z = \cos \frac{5}{6}\pi + i \sin \frac{5}{6}\pi$, $z = \cos \frac{3}{2}\pi + i \sin \frac{3}{2}\pi$ から,

$$z = \frac{\sqrt{3}}{2} + \frac{1}{2}i, \quad z = -\frac{\sqrt{3}}{2} + \frac{1}{2}i, \quad z = -i$$

(2) (1)と同様に, $z^{100} = i$ を満たす複素数 z について, $r^{100} = 1$ から $r = 1$ となり, $0 \leq 100\theta < 200\pi$ から $100\theta = 2k\pi + \frac{\pi}{2}$ ($k = 0, 1, 2, \dots, 99$) であるので,

$$100\theta = \frac{4k+1}{2}\pi, \quad \theta = \frac{4k+1}{200}\pi \quad (k = 0, 1, 2, \dots, 99)$$

すると, $z = \cos \frac{4k+1}{200}\pi + i \sin \frac{4k+1}{200}\pi$ となり, $\operatorname{Re}(z) \leq \frac{1}{2}$, $\operatorname{Im}(z) \geq 0$ から,

$$\cos \frac{4k+1}{200}\pi \leq \frac{1}{2} \dots\dots\dots \textcircled{1}, \quad \sin \frac{4k+1}{200}\pi \geq 0 \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

①より $\frac{\pi}{3} \leq \frac{4k+1}{200}\pi \leq \frac{5}{3}\pi$, ②より $0 \leq \frac{4k+1}{200}\pi \leq \pi$ なので, $\frac{\pi}{3} \leq \frac{4k+1}{200}\pi \leq \pi$

これより, $\frac{200}{3} \leq 4k+1 \leq 200$ となり, $\frac{197}{12} \leq k \leq \frac{199}{4}$ から $16.4 < k < 49.8$

よって, $k = 17, 18, \dots, 49$ から, z の個数は $49 - 17 + 1 = 33$ である。

(3) $z^n = i$ を満たす複素数 z を, $z = r(\cos \varphi + i \sin \varphi)$ ($r > 0$, $-\pi \leq \varphi < \pi$) とおくと, $r^n = 1$ から $r = 1$ となり, $n\varphi = 2k\pi + \frac{\pi}{2}$ ($-n\pi \leq n\varphi < n\pi$) であるので,

$$n\varphi = \frac{4k+1}{2}\pi, \quad \varphi = \frac{4k+1}{2n}\pi \quad \left(-\frac{n}{2} - \frac{1}{4} \leq k < \frac{n}{2} - \frac{1}{4}\right)$$

すると, $z = \cos \frac{4k+1}{2n}\pi + i \sin \frac{4k+1}{2n}\pi$ となり, $\operatorname{Re}(z) \geq \frac{1}{2}$ から $\cos \frac{4k+1}{2n}\pi \geq \frac{1}{2}$

$$-\frac{\pi}{3} \leq \frac{4k+1}{2n}\pi \leq \frac{\pi}{3}, \quad -\frac{2}{3}n \leq 4k+1 \leq \frac{2}{3}n$$

これより $-\frac{n}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{n}{6} - \frac{1}{4} \dots\dots\dots \textcircled{3}$ となり, n を 6 で割った余りで場合分けを行

い, ③を満たす整数 k の個数 N を求める。そこで, l を 0 以上の整数として,

(i) $n = 6l + 1$ のとき

③より $-\frac{6l+1}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+1}{6} - \frac{1}{4}$ となり, $-l - \frac{5}{12} \leq k \leq l - \frac{1}{12}$ から,

$$-l \leq k \leq l-1, \quad N = (l-1) - (-l) + 1 = 2l$$

すると, $3N - n = 3 \cdot 2l - (6l + 1) = -1 < 0$ となり, $N < \frac{n}{3}$ である。

(ii) $n = 6l + 2$ のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+2}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+2}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{7}{12} \leq k \leq l + \frac{1}{12} \text{ から,}$$

$$-l \leq k \leq l, \quad N = l - (-l) + 1 = 2l + 1$$

すると, $3N - n = 3(2l + 1) - (6l + 2) = 1 > 0$ となり, $N > \frac{n}{3}$ である。

(iii) $n = 6l + 3$ のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+3}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+3}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{3}{4} \leq k \leq l + \frac{1}{4} \text{ から,}$$

$$-l \leq k \leq l, \quad N = l - (-l) + 1 = 2l + 1$$

すると, $3N - n = 3(2l + 1) - (6l + 3) = 0$ となり, $N = \frac{n}{3}$ である。

(iv) $n = 6l + 4$ のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+4}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+4}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{11}{12} \leq k \leq l + \frac{5}{12} \text{ から,}$$

$$-l \leq k \leq l, \quad N = l - (-l) + 1 = 2l + 1$$

すると, $3N - n = 3(2l + 1) - (6l + 4) = -1 < 0$ となり, $N < \frac{n}{3}$ である。

(v) $n = 6l + 5$ のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+5}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+5}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{13}{12} \leq k \leq l + \frac{7}{12} \text{ から,}$$

$$-l - 1 \leq k \leq l, \quad N = l - (-l - 1) + 1 = 2l + 2$$

すると, $3N - n = 3(2l + 2) - (6l + 5) = 1 > 0$ となり, $N > \frac{n}{3}$ である。

(vi) $n = 6l + 6$ のとき

$$\textcircled{3} \text{より } -\frac{6l+6}{6} - \frac{1}{4} \leq k \leq \frac{6l+6}{6} - \frac{1}{4} \text{ となり, } -l - \frac{5}{4} \leq k \leq l + \frac{3}{4} \text{ から,}$$

$$-l - 1 \leq k \leq l, \quad N = l - (-l - 1) + 1 = 2l + 2$$

すると, $3N - n = 3(2l + 2) - (6l + 6) = 0$ となり, $N = \frac{n}{3}$ である。

(i)~(vi)より, $N > \frac{n}{3}$ となるのは, $n = 6l + 2$ または $n = 6l + 5$ のときである。

したがって, 求める n の条件は, n を 3 で割ったときの余りが 2 である。

[解説]

複素数平面と n 乗根についての問題です。(1)と(2)は基本的ですが,(3)は同様な内容であるものの,場合分けが必要なため,かなり時間を費やします。